

ヤリイカの精莢による舌刺傷例

A Case of Glossal Injury by
Spermatophola of *Doryteuthis bleekeri*

八木 欣平 高橋 健一 内山 茂夫*
宮本 健司**

Kinpei Yagi, Kenichi Takahashi, Shigeo Uchiyama
and Kenji Miyamoto

魚類を生食することによりヒトに様々な障害が引き起こされることが知られている。アニサキス症や広節裂頭条虫症など寄生虫による疾病はその代表的なものであるが、今回我々はイカの雄の生殖器官である精莢が舌に刺傷を引き起こした例を経験したので報告する。

患者：37歳男子、職業 自営業。住所 北海道苫小牧市。

1989年4月21日に苫小牧市内の市場でヤリイカ *Doryteuthis bleekeri* を購入しサシミにして食べたところ、口腔内に異物感を、また舌に痛みを覚え、白い棒状の異物を数本吐出した。一部のものは舌に刺入しておりピンセットで除去した。除去後の舌の粘膜には肉眼的な変化はなかった。内視鏡で胃内部を観察したが、異物の存在は認められなかった。

吐出および除去した棒状の異物は刺入前に吐出したものと舌に刺入したものと形態的に2種類存在した(図1)。これらの中のものを10%ホルマリン液で固定した後、鏡検した。検討した検体の数は約10本であった。刺入前のものは長さ約30mm、幅2mmの棍棒状で、先端は細くなりコイル状を呈しており透明な外鞘の内部に射出管、粘着体および精子塊の構造が認められた(図3)。精子塊を取り出し、スライドグラス上で圧平し顕微鏡で観察すると多数の精子を認めた。これらの形態からこの棒状の異物はイカの生殖器官である精莢であると同定した。また、後者のものは約7mmの白色のやじり状で、これは精莢が刺入したあと外鞘と精子塊がはずれた粘着体と考えられた(図2)。

この精莢はイカが交接する時に雄から雌に受け渡され、渡された後射出管が反転し雌の体に付着するものである¹⁾。イカの精莢による口腔粘膜、舌、胃粘膜への刺傷例に

ついては、高岡ら(1982)²⁾が報告して以来中溝ら(1987)³⁾、岩田ら(1988)⁴⁾、中野ら(1988)⁵⁾および、高井ら(1989)⁶⁾が本州での人体例を報告しているが北海道では初めての報告例である。イカの種類については、高岡らおよび岩田らの報告ではスルメイカ *Todarodes pacificus*、中溝らおよび中野らはヤリイカであったが、高井らの例では特定されていない。今回のものは患者の食歴からヤリイカであることが確認されたが、北海道においてこれらの2種のイカを生食する機会は多い。臨床症状については、高井らは胃粘膜への刺傷を報告しており、胃鉗子による除去を行なっているが、今回の例では刺傷は舌への軽微なもののみであった。日本人の食習慣としての魚類の生食はアニサキスや広節裂頭条虫などの寄生虫感染を引き起こすことしばしば問題となるが、寄生虫感染だけでなく、今回の例に見られるような傷害を引きおこすこともあることを認識しておく必要があろう。特に近年、輸送技術が向上し新鮮な魚類が市場に出まわっており、今後もこのような事例に遭遇する可能性があると考えられる。

最後に今回の報告にあたり貴重な資料を提供していただいた東京水産大学の奥谷喬司教授、北海道大学の久保田信博士ならびに聖マリアンナ医科大学の神田鍊藏教授に深謝致します。

文 献

- 1) Barnes, R. D.: Invertebrate Zoology, 460 (1987)
- 2) 高岡基雄他：耳鼻咽喉科, 54, 137 (1982)
- 3) 中溝宗永他：耳鼻咽喉科, 59, 245 (1987)
- 4) 岩田徹也他：衛生動物, 39, 184 (1988)
- 5) 中野稔也他：日本口腔科学学会雑誌, 37, 1182 (1988)
- 6) 高井憲治他：第41回日本衛生動物学会大会、要旨集 p. 25 (1989)

* 苫小牧澄川病院

** 旭川医科大学

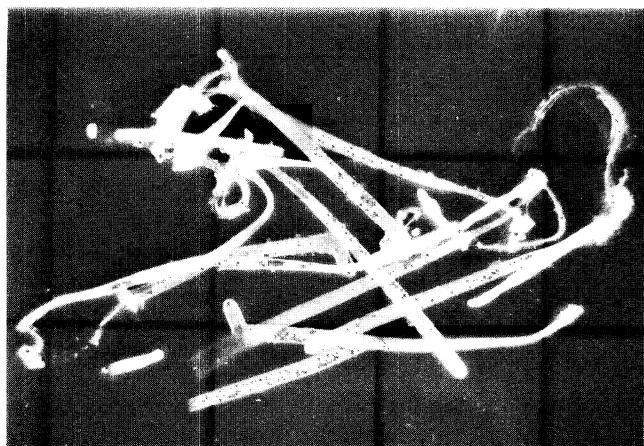


図1 患者が吐出したヤリイカの精莢および粘着体

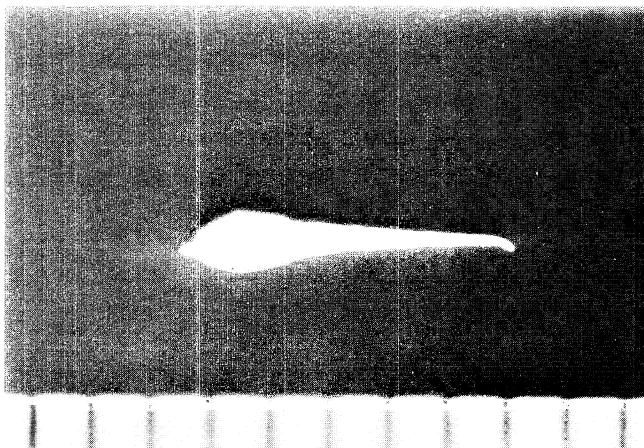


図2 舌から除去された粘着体

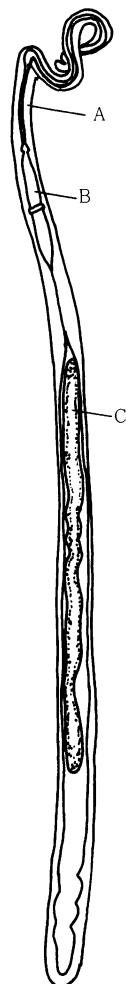


図3 精莢の構造

A. 射出管 B. 粘着体 C. 精子塊